様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：４１５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００４４１

研究課題名（和文）長い１８世紀における感覚／感性の観点からの感受性の学際的再検討

研究課題名（英文）An Interdisciplinary Reconsideration of Sensibility from a New Perspective on Sense(s) and Affect in the Long Eighteenth Century.

研究代表者
阿部　裕美（今井裕美）（ABE, Hiromi）

東北文教大学短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：１０２４８７２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀の「感受性」に関する研究を、いわゆる「長い18世紀」を範囲として、肉体・精神・魂、そして感覚／感性という観点から、学際的に再検討した。具体的には、科学、宗教、ジェンダー言説など諸言説と感受性の関係性に着目し、① 肉体・精神・魂の関係性の多様な可能性（の模索）という文化的状況、② 感覚／感性がもつ意味／評価の変容と多様化の過程、③ 18世紀後半から提起され始める「文学」の果たす新たな機能の文化的意味を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、(1) 宗教的状況と科学思想の勃興と感受性を関連させたこと、すなわち、宗教と科学の問題、(2)肉体・精神・魂、そして感覚／感性の問題と感受性を接続し、従来否定的に扱われてきた感受性の要素を明らかにしたこと、すなわち、精神と肉体の問題、(3) 更に、女性を中心に考えられてきた「感受性」研究を、ジェンダー構造全般を視野に入れて考えたこと、すなわち、フェミニズム、ジェンダーの問題、そして、(4)18世紀後半の文学と人間と社会との関係性の見直しを図った状況を、現代の文学研究・教育の問題とも結びつけたこと、すなわち、現在の人文社会科学の問題を明らかにした意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study reexamines the multiple functions of sensibility in the long eighteenth century in the light of body, mind, soul, and sense(s). Focusing on the representations of sensibility in the various discourses such as science, religion, and gender, we have made clear the following three points: (1) the eighteenth-century cultural conditions in which the body, mind, and soul could be related with each other along with the new sense of sensibility; (2) the historical process of transfiguration and diversification of "sense(s)"; (3) the cultural significance in the new function of “literature” frequently discussed in the late eighteenth century.

研究分野：18世紀からロマン派時代にかけての詩・小説

キーワード：感受性　宗教　科学　ジェンダー　精神　肉体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「感受性」に関する文学・文化研究は、同時代の医学言説とのすりあわせにより、近年、人間の身体性が文化に与える影響について重要な成果を出してきているが、一方で、身体に関する研究が重視され、文学言説と医学との関係性が重視されるとき、精神的な共同性について捉え切れていない場合もある。また「感受性」に関する研究が主に女性の身体と結びつくとき、男性（あるいはクィアな）身体の問題も軽視されがちになる。このような背景を踏まえ、本研究では、従来の文学研究と新しい「感受性」研究の結びつきを再検討するため、従来、否定的に捉えられてきた感受性を、(1) 従来の文学研究の成果に加えて、その肯定的側面、とりわけ、近代社会を構成する主体の問題として捉え、 (2) ジェンダー構造を踏まえた精神と肉体の問題として捉え、(3) そして、宗教的文脈を文化的に捉えた肉体・精神・魂との関係性から検証することの必要性の認識から始まった。このような点から研究を行うことで、感受性とは果たしてどのような社会的な意義を備え、社会の構成員としての主体をどのように作り上げようとしていたか、という問いに答えることが可能となる。

２．研究の目的

本研究の目的は、上記の背景を踏まえ、「感受性」研究を、従来の 18 世紀の枠組みから広げ、17 世紀後半から 19 世紀前半までも含めた「長い 18 世」における、精神性の問題も含めて多様な言説との関係の中で問い直すことである。そのため、従来の「感受性」研究では、中心的ではなかった（医学言説以外の）科学言説、宗教言説、（女性だけでなく男性、クィアも含めた）ジェンダー言説と感受性の関係性の中で考察する。具体的には、近代的な主体が誕生する／構築される時代において、(1) 肉体・精神・魂の関係性の多様な可能性（の模索）という文化的状況を再構築すること、(2) 主体が単独にもつ感覚／感性、主体同士が共有する／対立させる感覚、そして感性がもつ意味の変容と多様化の過程を明らかにすること、(3) 「感受性」という概念を、18 世紀後半における「文学」の果たす新たな機能の模索という観点から捉え直すことを目的とした。

３．研究の方法

研究期間全体として、研究代表・分担者がそれぞれの専門に応じて次のような研究を行った。梶理和子が 17、18 世紀演劇に関する感覚／感性と感受性のジェンダー論を踏まえた研究、川田潤が 17、18 世紀詩、散文に関する肉体・精神・魂の問題の科学論を踏まえた研究、吉田直希が 18 世紀の公／私空間における小説と宗教に関する感受性の研究、今井裕美が 18 世紀小説及び詩に関する感受性の研究、そして佐藤恵が 19 世紀初頭の小説に関する感受性の観点からのジェンダー論を踏まえた研究。

研究の第 1 段階では、各研究を行う際以下の 3 点から、相互に研究の乗り入れ・意見交換を行った。すなわち、「感受性」という観点から、(1) 17 世紀後半の科学、宗教の観点からの詩、演劇の研究、(2) 18 世紀の宗教、哲学等の観点から詩、演劇、小説の研究、(3) 19 世紀初頭の詩、小説との通時的観点からの差異と類似性の研究、である。

研究の第 2 段階では、研究協力者との意見交換を踏まえ、全員が相互に研究分野を関連させた上で、近代商業社会における感受性の問題が美意識、共感、理性などと結びつき、新たな価値観などの文化的形成過程で果たしていた役割を明らかにしつつ、感受性を、17 世紀にまで遡る肉体・精神・魂の問題との連続性をもったものとして検討するとともに、感受性を、19 世紀初頭まで続く、認識、意識の変化を伴う新しい社会構造の基盤をもたらすものとして検討した。

このような作業を踏まえた上で、その後、第 3 段階として、第 2 段階と同じく、全員が相互に研究分野を関連させた上で、宗教、ジェンダー、商業社会における感覚／感性の意義、とりわけ、「長い 18 世紀」の社会・文化的なコンテクスト、具体的には商業社会の進展における感受性の変化というコンテクストから、感受性の変化・多様性を検討した。

４．研究成果

本研究は感受性を「長い 18 世紀」というスパンの中で捉え直し、多様な言説との関係の中で捉えることにより、近代社会の中での主体構築の過程として重要な役割を果たす（ことを期待される）、感受性の従来注目されてこなかった新たな役割を検討し、以下の成果がもたらされた。

(1) 17 世紀後半において、女性や低い階級層が様々な形で公的空間に出現しはじめ、カトリックとプロテスタント、国王と議会、土地所有と新興資産といった二項対立的な関係が不協和音をもたらす一方、そこから新たな感覚、価値観が生じていたことを、アフラ・ベーンをはじめとす

る女性作家の演劇作品で確認した。具体的には、高価な輸入品（砂糖、陶磁器、茶、絹、スパイス等）や社会的地位に対する新興の人々の欲望が表面化していくことにより、それまで支配的であった制度や人々の感覚／感性の変化が生じ、借金と信用の問題、流行りの高級品と女性の貞節や洗練の問題、植民地における犯罪者の経済的、政治的成功などが問題化される。すなわち、センスやテイストは、17 世紀後半の演劇では身体的感覚や性的快楽と関連するが、市民階級が台頭する 18 世紀に入ると、真贋の見極め、真に美しいものや徳のあるものを感じる力や判断する力へと意味合いが変わっていく。また、このような意味の変化、多様化をもたらした存在として、キャサリン・オブ・ブラガンザがイングランドにもたらした湾岸都市や贅沢品が、新しい感性に向かう流れの一つの契機であることも明らかにした。

(2)ウィリアム・ワーズワースが、詩の意義を肉体的な感受性と非肉体的な魂の関係性の中で捉えようとしていたことを踏まえ、感受性の問題を 17 世紀後半まで遡り、ヘンリー・モアの韻文、散文作品における感受性の役割を原子論との関係から考察した。17 世紀後半、原子論がモアにより受容されるとき、原子論はプラトニズムという精神の問題と結びつけられる。その結果、人間の魂は物質と非物質の間の何らかの中間状態として措定され、外部の刺激を肉体の中にあって受容する sensorium という器官の中に存在するとされ、避けがたい物質性との関係が明らかになる。更に、理性と正反対の「熱狂」の問題について、モアは、不安定な肉体と精神の混同に基づく信仰は偽りの精神性・熱狂を作り出すとしつつも、同時にその不可避な絡み合いを認めることで、真の（宗教的）熱狂を考察していた。受け容れざるをえない肉体に対して精神をいかに位置づけるか、換言すると感受性の肉体性と精神性、それこそが近代社会が抱えた課題であり、同じ問題系を、モアはネオプラトニズムを基盤にキリスト教との関係で考察し、ワーズワースは、詩を基盤に、宗教ではなく、道徳との関係で解決しようとしていた。

(3) 18 世紀の公／私空間における感受性の再検討を行う際に、小説に表された「感受性」の意義や機能を、宗教、哲学の観点から再検討し、国教会とメソディズム、スミス、ヒュームらによる熱狂論と結びつけ、更に、作中の登場人物の遍歴が当時の政治的状況（ジャコバイト、七年戦争）と結びついていたことを明らかにした。更に、「アダプテーション」＝「テクストを横断して形式の変化をもたらすもの」という定義にしたがい、作品が「共感」を軸に、先行テクストを書き換えているという前提に立ち、公共圏で無限に断片化し、商品化される歴史的過程を検討した。具体的には三十年戦争から七年戦争に至る英仏の政治・経済・軍事的対立をまとめ、ジャコバイトがメソディズムの熱狂とその脅威、及び、ジャコバイトによる反乱と熱狂をめぐる様々な議論と結びついていることを明らかにした。その上で、国内外における旅行者の移動が意味する経済的諸問題、18 世紀前半の名誉革命体制の確立、強化の歴史とともに感受性文学の多様性を、「財政＝軍事国家」という観点から考察し、感受性の歴史的変遷をジョン・ゲイの文学作品と結びつけた。

(4) 18 世紀散文における「感性」「感受性」の社会的・文化的機能について、1707 年のイングランドによるスコットランド併合に端を発する、両者の政治的対立が顕在化した時期を中心に、スコットランド側の国民意識形成における「公正」「正義」「共感」の機能を探った。イングランド式の非人間的な商業主義による政治的かつ精神的な侵略への抵抗は、他者への同情・共感や社会的正義というスコットランド伝統の国民的美徳を前景化させたスコットランド啓蒙主義運動と重なる。更に、情動に支配される弱者の心象をスコットランドに植え付けた、感傷文学の台頭という先行研究を基盤に、『感情の人』（1771）、ヘンリー・マッケンジーが手掛けた 2 つの定期刊行物『ザ・ミラー（*The Mirror*）』（1779-80）および『ザ・ラウンンジャー（*The Lounger*）』（1785-87）を分析対象とし、「感性」「洗練」「正義」の概念が当時の世論形成で果たした機能を明らかにした。具体的には、スコットランド人にふさわしい振る舞いや価値観が「作法、慧眼、そして文学（manners, taste, and literature）」を論じる両紙を通じて世に提示されたこと、書き手の匿名性によって読者との間に徳育における対等な関係性が担保されたこと、さらに、アダム・スミスが述べる善悪の判断を管理する存在とは異なり、郷土愛に根ざした「傍観者」であるエッセイ・ペーパーが分別眼（taste）や「感性」の形成に貢献していたことを明らかにした。

(5)産業革命に伴う社会構造の大変革の中、ワーズワースやブレイクらロマン派詩人たちは、工業化社会で蝕まれていく人間性へ対峙する「自然」の象徴として、子どもの「純真無垢」や「自然性」を謳い、子どもの「感性礼賛」を行ったが、一方で、18 世紀末までの主な小説には子どもの姿は見られず、19 世紀初頭、ワーズワースらと同時代のオースティンの小説においても、無邪気な子どもが登場するものの、大人の世界を補完する形で触れられるに過ぎない。この時期のイギリスは、イギリス東インド会社の貿易独占権と強力な軍事力により植民地と交易を拡大させ、世界経済の中心がアムステルダムからロンドンに移行し、金融・サーヴィス業が発達した時期である。旧来の大土地所有者層によって形成されていた文化から、銀行家や貿易商など金融・サーヴィス業に従事した中産階級出身のジェントルマンの新たな文化への移行期において、銀行家の兄の伝記的事実との関連性を踏まえ、オースティンの小説中に描かれる商人の特徴と商業社会におけるジェントルマンの特性について考察した。その結果、旧来の大土地所有ジェント

ルマンと新興の商人ジェントルマンの協働の中に、ジェントルマン資本主義の萌芽を見出すと同時に、ジェントルマン的商人の表象において、幼子のいる幸福な家庭像について、ロマン派詩人のように近代社会に対峙する子ども像とは一線を画し、オースティンは純真無垢で豊かな感受性を持った幼子の姿によって、商人自らの感受性を補完・担保し、近代商業社会におけるジェントルマンを肯定的に描き出していることが明らかとなった。

全体としては、以上のような検討と成果に基づき、近代・商業社会の進展において、科学、宗教、道徳、哲学的な言説の中で、感受性の過剰性を消し去るのではなく、利用しつつ、国民国家の形成と発展の様々な試みがなされ、それに伴い感受性が変容した過程を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 今井裕美	４．巻 9
２．論文標題 スコットランド併合後の国民意識形成おける 「異質」の文化衝突	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『東北文教大学・東北文教大学短期大学部 紀要』	６．最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川田潤	４．巻 19
２．論文標題 結合から分割へ ーマーガレット・キャヴェンディッシュの原子論における多様性と秩序の問題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『十七世紀英文学における生と死』（金星堂）	６．最初と最後の頁 237-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田直希	４．巻 36
２．論文標題 書評 D・エジャトン『戦争国家イギリスー反衰退・非福祉の現代史』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ヴァージニア・ウルフ研究	６．最初と最後の頁 167-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田直希	４．巻 6
２．論文標題 Female Gaze and Male Sensibility in A Sentimental Journey	５．発行年 2018年
３．雑誌名 18世紀イギリス文学研究	６．最初と最後の頁 70-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川田潤	4．巻 27
2．論文標題 文学と科学との接点ーマージョリー・ホープ・ニコルソンの研究を歴史化する	5．発行年 2018年
3．雑誌名 福島大学人間発達文化学類論集	6．最初と最後の頁 103-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Riwako Kaji	4．巻 54
2．論文標題 Aphra Behn's Untold Story: Secret Response to the Queen and King	5．発行年 2021年
3．雑誌名 試論	6．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤恵	4．巻 51
2．論文標題 オースティン作品におけるジェントルマンと感受性 －ジェントルマン的商人の表象－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学紀要	6．最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛下真優子、佐藤恵	4．巻 51
2．論文標題 民衆における人間形成と公教育への移行ーイギリス民衆文化とデイム・スクールに着目してー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学紀要	6．最初と最後の頁 121-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 今井裕美
２．発表標題 The MirrorおよびThe Lounger にみられるHenry Mackenzieの「義憤」へのまなざし
３．学会等名 イギリスロマン派学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤恵
２．発表標題 オースティン作品におけるジェントルマンと感受性
３．学会等名 日本英文学会東北支部　第74回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川田潤
２．発表標題 原子論の受容／需要と詩的想像力と「美学」 ― Thomas Creech のLucretiusの翻訳をめぐる問題
３．学会等名 17世紀英文学会東北支部例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 今井裕美
２．発表標題 スコットランド啓蒙主義におけるセンシビリティと「弱者」の感情作法
３．学会等名 日本英文学会東北支部第73回大会シンポジア 英米文学部門
４．発表年 2018年

１．発表者名 梶理和子
２．発表標題 変わりゆくセンス・テイスト・センシビリティ ― 転換点としての王政復古期イングランド.
３．学会等名 日本英文学会東北支部第73回大会シンポジア 英米文学部門
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田直希
２．発表標題 感じるジャコバイトー近代資本主義の小説的特質
３．学会等名 日本英文学会東北支部第73回大会シンポジア 英米文学部門
４．発表年 2018年

１．発表者名 川田潤
２．発表標題 文学と科学の対立を歴史化する
３．学会等名 日本ロレンス協会第49回大会ワークショップ「オクスフォード英文学と冷戦期の／ポスト帝国日本の「英文学」― F・R・リーヴィスの退場を規定した歴史的可能性の条件とは？」
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 松本朗、岩田美喜、木下誠、秦邦生　共編	４．発行年 2019年
２．出版社 三修社	５．総ページ数 408（58-74）
３．書名 イギリス文学と映画	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐藤　恵 (SATO Megumi) (50341730)	東北生活文化大学短期大学部・その他部局等・准教授 (41306)	
研究分担者	梶　理和子 (KAJI Riwako) (60299790)	山形県立保健医療大学・保健医療学部・准教授 (21501)	
研究分担者	川田　潤 (KAWATA Jun) (70323186)	福島大学・人間発達文化学類・教授 (11601)	
研究分担者	吉田　直希 (YOSHIDA Naoki) (90261396)	成城大学・文芸学部・教授 (32630)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関